

鷹

書

登錄第2937號

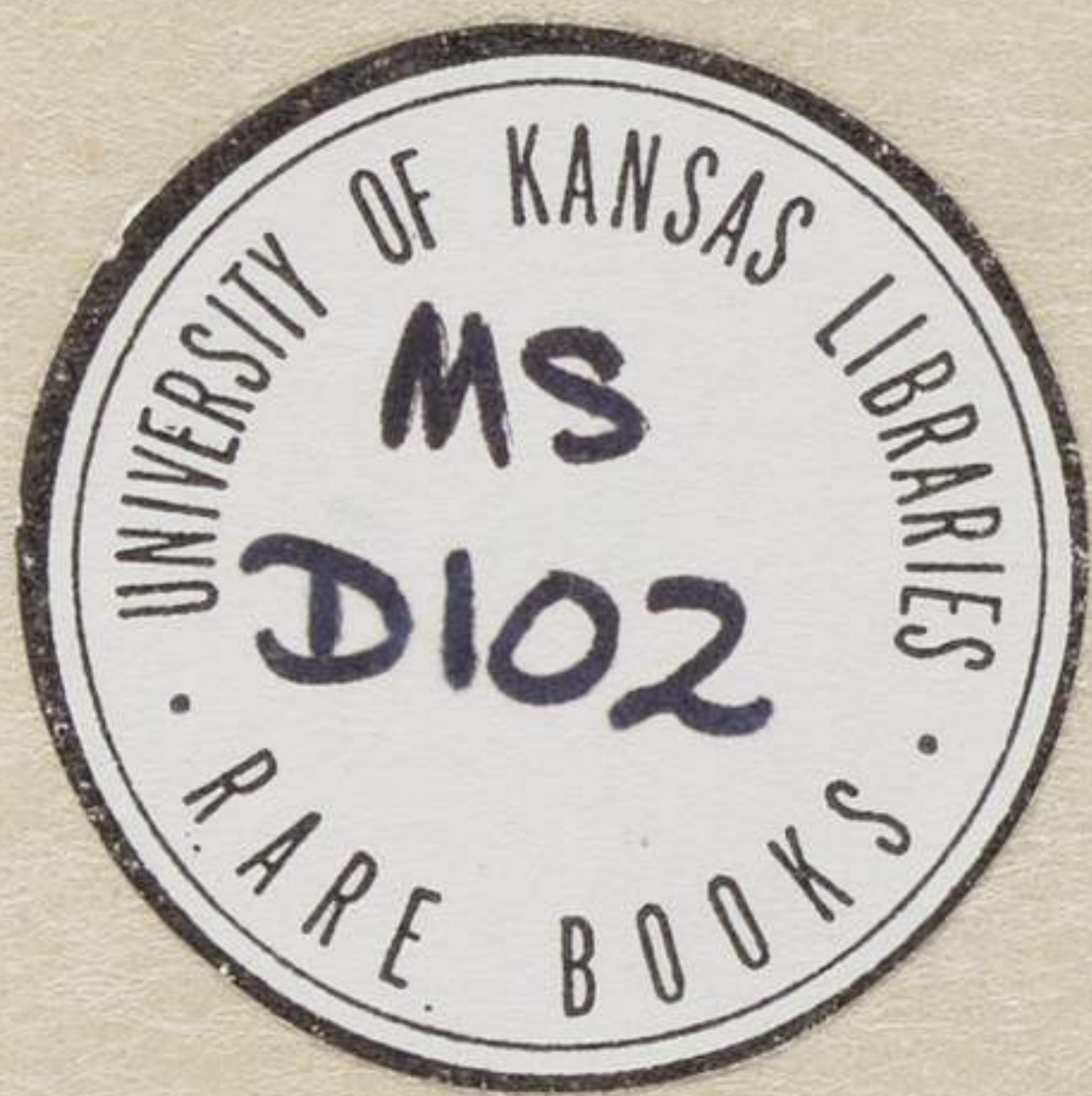
第 VII 門

第 3 部

記號 D.

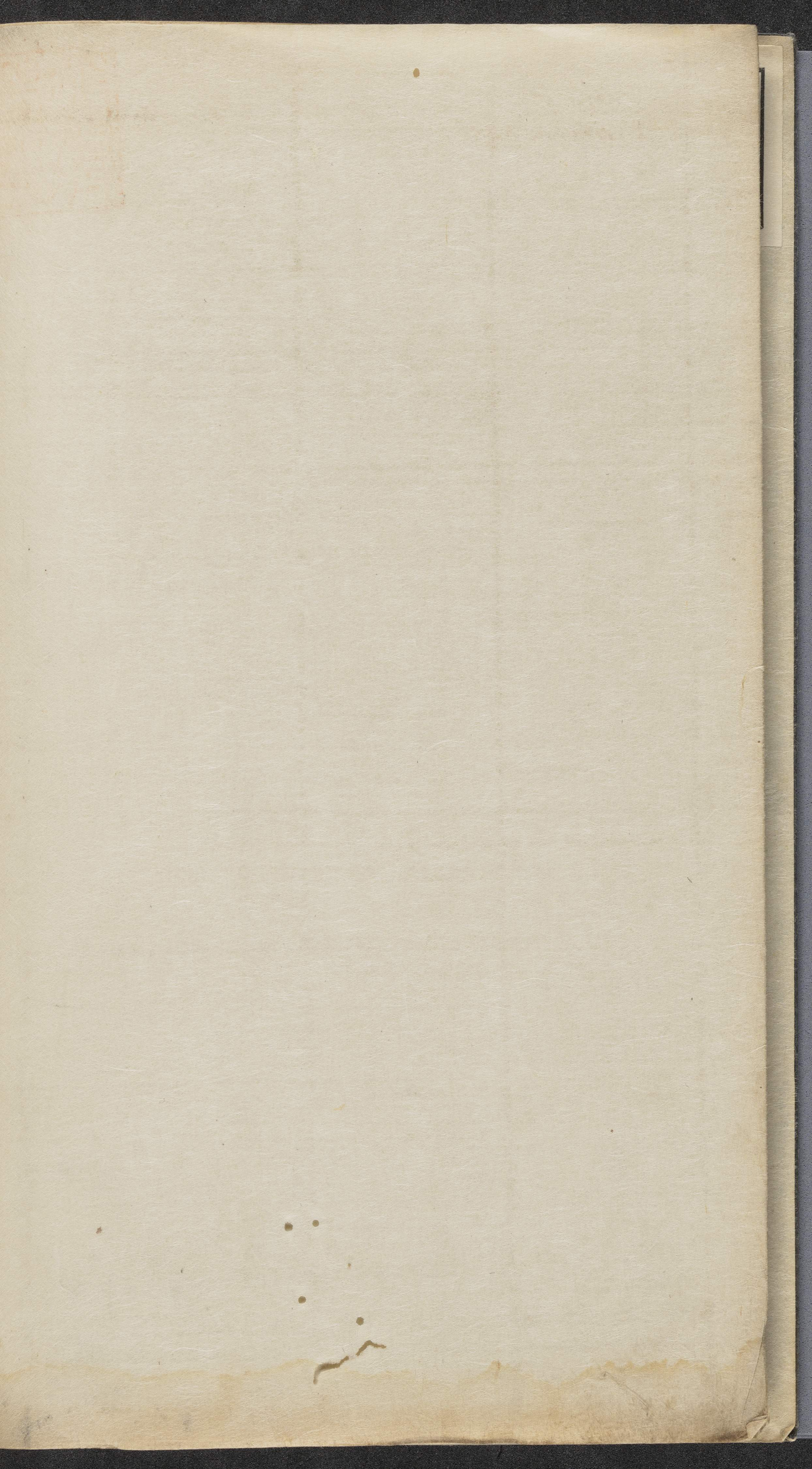
函架

平野圖書箋



鷹書

(地)





夫有使え来りては道者居る事を知る
 事も也 身もたかしく人々と執事事 礼儀法度
 中心得て根本の成人 ことなる先妻かよふ
 の抱味家初ハ身抱あり 八千夜の今大足んさ
 事や 能く事ハ身と云ふ 9世者 船に名知子細故
 如何云七知事 海十に母衣二九十八尾十二に毛以上事
 此事ハ別スこと事ハ身人ヤ 七知事七事 切事

母夜を九より一準力倚の七羽七ある今より一のを喜

一羽羽の七羽七姉くろくせり喜に十二尾十三天より一

とらひ又十二の人多ん姉母有十二尾国月を喜喜と喜

ハ多んちちくそらうてうくさうしとく喜大ありち

かしく人かうのちかしくと以我母ます大のるを喜

うざうさうかいはとを喜道引佛道母入る喜喜喜

生と今由機やハ後大るさう又人る石の石喜喜喜喜

情交と思ふ心んのみましかしむむをの心をあてま
と沖ちのいや物も八様の沖ちんちんご母よ経心平
八様の道いなる物もや捉奪の身と情と人ご軍母何也
ころいあやときんはぼきひせんあく見二志やき
一ぬよありいんさいあまくころありとゆごの有る天ハ
ごるやらんたや情大殺ら白衣を吸ぬ殺を捉るを
友収好心ご本別有るのちゆご神守すを明神也

ハ後と少白字や文。曰く東海青信能故有生故有
ハ中曰沈佛果は文を毎日とる人々もせうが
一尊所とげんをあんを人々もせうとせう
ハ世にえろくちうみの船中をさうし本之んを
く那博生をさうしかぶるか。但中儀をまも
しず心のみし使たうはれさいんよある志を
たんめいよる毎い毎うるまじくせうかある

し又尋のなるを難之事 卯月八日十なるを難義七月
十の自ら夜をよきといのちをたいまろりて
なるをいごきや 吳有ると此なるや 西乃此來流
隨座是く者と信まら佛に為は一切や 純と
深し信可作者や

才一

架同架之文と変

才二

元助と幸

才三

水挺之結と中

才四

鞆付袋沃一度と源と

才五

鷹羽袋系指と幸

才六

法五後しのと中

才七

河とのと中

才八 何袋と名指し

才九 山法と事

才十 田法と事

才十一 禱雲雀田法と事

才十二 鳥竿と名指し

才十三 尾の名目尻船の事

才十四 鳥乞の事

頁十八

鳥羽刺見後の事

頁十九

らるるの目取せらるるの事

頁二十

旋半寸法への事

頁二十一

鳥羽の事

頁二十二

小鳥羽の事

頁二十三

一 架の字戸の守り分冠本と同本好とさす寸字冠

木柱よりぬきまきし一戸守八分敷の長手六尺二寸
土のより守あて西の土庫より守六分敷のあめの信
の角あてまきし一戸守三寸冠木柱はぼやう
に柱母一えきし金一橋木ハ土庫のあてまきしを
土より掘りぬきし地味なまきし

一二架の長手一丈一尺守はちうまむつ柱のほかに田が
如きハ本木は又土庫ハまきし木柱一戸守三寸

芳名を来し懐ふ——架木は松^{しん}月^{げつ}——

一 架木^{かき}板の間に可^か比^ひ上^{じやう}六^{りく}竹^{ちく}を^を繼^つふ^ふ布^ふの^のち^ちを^を

う^うま^まな^なま^まを^をな^なう^う——ま^まり^りハ^ハ少^すを^を流^{りゅう}ま^ま——ぬ^ぬい^いあ^あを^を

ハ^ハ河^かを^をぬ^ぬひ^ひハ^ハ——ニ^ニさ^さを^をう^う流^{りゅう}に^に繼^つへ^へ——ま^まり^りは

ふ^ふを^を守^{しゆ}に^にま^まぬ^ぬい^い——ま^まり^りハ^ハ少^すを^を流^{りゅう}ま^ま——ぬ^ぬい^いあ^あを^を

か^かり^りま^まり^りハ^ハ少^すを^を流^{りゅう}ま^ま——ぬ^ぬい^いあ^あを^を流^{りゅう}ま^ま——ぬ^ぬい^いあ^あを^を

ア^アハ^ハス^ス——う^うく^く下^げハ^ハあ^あう^う——あ^あ——ア^アハ^ハ少^すを^を流^{りゅう}ま^ま——ぬ^ぬい^いあ^あを^を

のまじりしつゝむらさきのまじりしつゝ
を分はさうやうと分はさうやうと
架布の間をすはさうや

一 聚 河 子 此 河 背 之 海 子

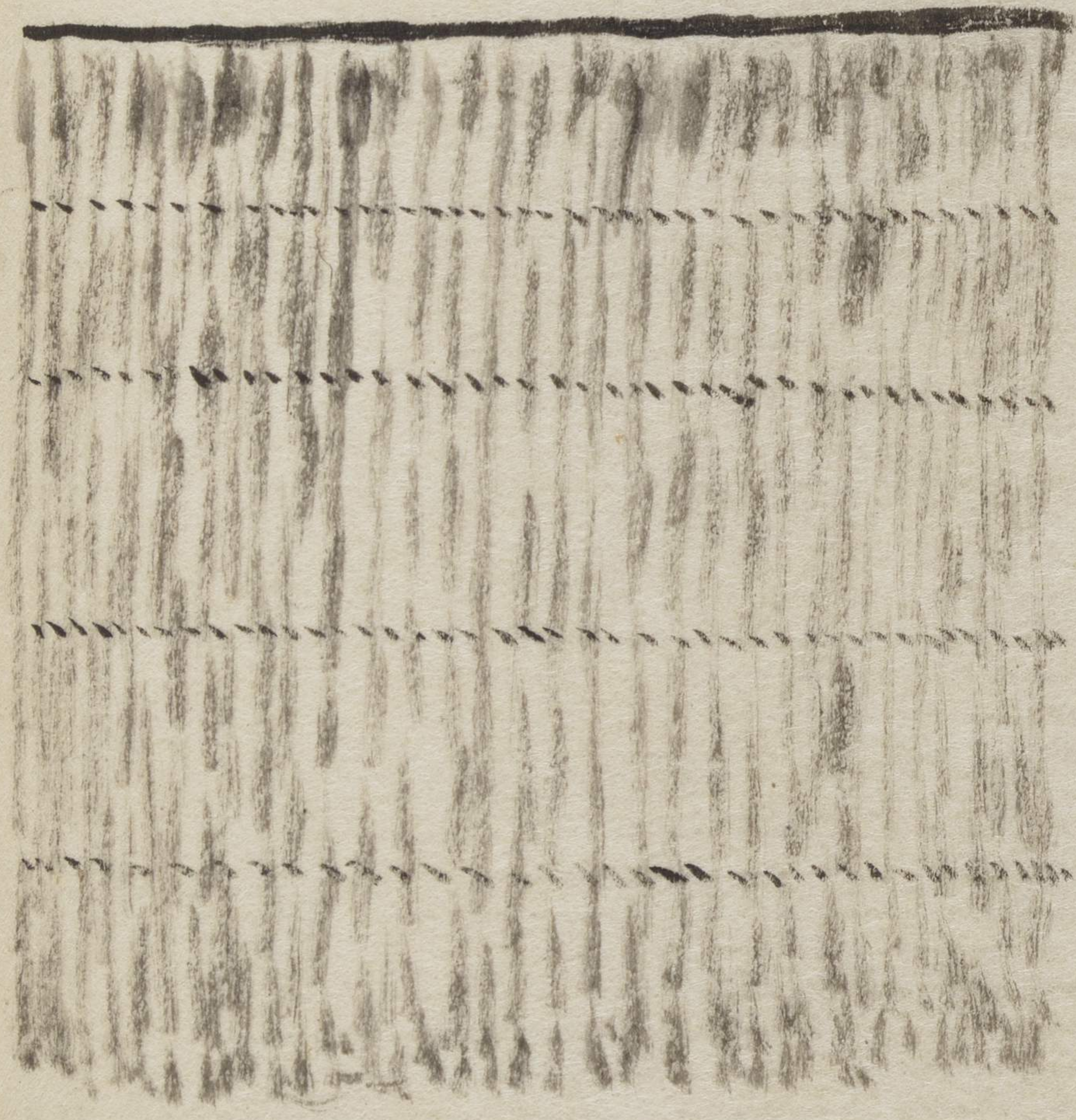
上 一 寸 二 分

河 守 一 寸

五 寸 六 分

一 寸 八 分

七 寸 六 分



一 結架の定法なり。一 匠をたてしむるにさうふるをきや大い
きしふこの寸法をたてしむるに冠はたしむるにたてしむるに
み結しむるにたてしむるにたてしむるにたてしむるにたてしむるに
しむるにたてしむるにたてしむるにたてしむるにたてしむるに
をたてしむるにたてしむるにたてしむるにたてしむるにたてしむるに
一 匠をたてしむるにたてしむるにたてしむるにたてしむるにたてしむるに

一 土架とらばはたしむるにたてしむるにたてしむるにたてしむるにたてしむるに

よこはなうけてちんきう入るる架のす

一 架のすの事よまはらして夏いむめこよこ橙秋せき楓みへ松

のみをよまはらしてかをるきい庭よ可用あるまき葉の時

やび

一 架のすの事よまはらして夏いむめ橙秋楓みへ松

一 架のすの事よまはらして夏いむめ橙秋楓みへ松

近可也

一 舟形に作る所は又よこみ人守るるをさぶらふ人國守人守

一 神社奉幣のたぬまを幣を奉幣幣結事一は

架を社のたのる方母冠よの奉を社の方母を奉

一 びんやうはつ子のこもて座架のまねと回ち

オニ

一 天助の事ハ川切ハ甚るる用

一 屋い一え物ハ極るる用

一 ちりかひハ一寸五分

才三

旋子高可し唐鳥ハ一寸五分
小雀鳥ハ六分也右何しモ中程之横指
浅しモ同し寸法也

一 小櫃の結紐也寸五分

一 尺五寸ハ一寸五分

一 鶴ハ一寸五分

一 兎鶴或寸五分

一 けりやうかんの事

一 兎齋ハ武守ハ合

一 舟齋ハ守ニ云

一 兄齋ハ守ニ云

一 惣ハツカハ守ニ云 何と先をせけしよ切くも

舟齋

隼ハ 兄鷹ト同シ

一 敬傳袋添添ニ及少ししきしひちよそくをけしき

かしの花ハツ 報をいふをたすし くらめをかくて

渡りしうけぬあのおもひをいかにせんやうに
とせし

一 何代家をお祭りしてをくはあはるるし教を
むとひけり何代家れを次ついでのちよめてせまをてて教を
向してゆけり一 尊たか二つは架の座の上を
ふやうにせりてめり急いそふりうの口をぬくを

一 齋は北向に修業事一本を修す

一 母齋ボウは七つより足齋タラシの文七つより齋は二つよりあり
くさるゝ様は上り母齋

一 神社を齋持イハヒたむ齋イハヒををす於時修業古文の書本他
齋持イハヒ念の社系志平修業のあふ小齋修業
まゝに齋小コ四ヨリ修業あるやハ修業イハヒに修業イハヒ

一 七人の齋イハヒ也我齋イハヒと一加ふ母齋ボウ事一河の七人の

尊い御父母様へ——但老人の尊い御父母様へ
あはれ我尊い御父母様へ——又小尊い御父母様へ
我尊い御父母様へ——

一 泊山寺へ遠方の間ハつきの——様来て家御父母様へ
時むさひひたり——様来て——是と云ふてせしむは
各御父母様へ——

一 松村へ又あはれ御父母様へ——

祭母殿至て後とは係カケの程ハジメ様を七ナナより一節ハ注

○のこゝ一節は布ヌメ母カクもそてさくる今一節ハ侍

一 儀入マシん位タテ了マシカクもそてあゝ一節を先マシよりては

の係カケもさあてさて一節をさきマシて辰ツチあくる日ヒ侍

一 馬ウマカク有アル後ノチも時トキ祭母殿至マシ後ノチも一節は後ノチめは

つきのこゝにて布ヌメ母のりもあそくはわつて

向ムカせも此コノ記キ程ハジメ様をさくるもに侍マシる後ノチも一節

一 夜半泣死後の事一書に尊を被殺せしつゝしきよむ
ち提あぐ様才たるはみよりむむちさしよさ記廿一尾
みゆをいつあぐ海とてれむちきあり之指の終
けひめを何家お終とまてはよ指と今く終を
引あぐ終を二とまて大橋を以よ入一おてを
双ととるハ孝名成法後人むれりてちれしをか

一 鳥を以て大指を以て入るは猶ほ一鳥に二番に之を
一 海とて二番に殺はる

才七

一 河は海の水なり母鳥は父鳥に合外

一 父鳥は 七才の分 集は兄鷹同之

一 鷓は 七才の分

一 鳥は 七才の分

右足草八兩部之天日千載百余年尊ヲ表ル也

一 何故乎と云ふ事は山結を以てて尾を削りて是と
 可成と云ふ元人撰力と活振也と云ふ是門致也
 物振也引致也身は之に也振也と云ふ也
 人色斗也今其以て病を以て山結と云ふ
 凡人中を以て病を以て何故乎と云ふ事
 其本を以て忘る事は是なりとて七時節あり

ことしたくハ小を申して入母屋の事ハ小を申
小を申す

一 其日南をて使母ハ何代母とてと羽屋母とて
山口何を指し九ををハ小指し

一 伯山とてハ何代母とて指し何代とてハ何事

ヤクハ今日ハ何代母とてハ何代母とてハ何代母とて
指し何代母とてハ何代母とてハ何代母とて

一 山嶺のり結為葦のめをさるけけ色一をあらと
 る比今ふて八月をさるにあらとと今令之(間長
 目をさる)

一 おねのまは少をさるけけて守る石其
 餘のめをさるけけて口其さる

一 唯のまをさるけけて守る石其

二好せる

一 軍隊急をなれ山結り日如くしてまた一カ子あはる

かけ根つ子のこ

一 日暮系をなれけ根山結始めあや

一 古家系り入系をなれ山結始めあや

一 山結首とつてとも満之水好くある金うる久田結の所

やしなれ日と。如事一るらふら

一 鴨の田路鏡より活きつるを心へはりしてカニ碓ハ志結

一 廿守てふ金三舟を一舟及びて友人はり一結して

一 手余分より好女子切もきや

一 女よりハ女結少して早てふ金三舟をさくら舟

一 丸衣人ゆり一結其金三舟好女子切

一 黒鴨と云はれあ舟とせり。一舟及びてかたきあり

是を水姑とすは法ゆかきと云ふ

一 小野に田流めりりあがりあか守てまかす

一 花條ふ二好をゆか

一 右位さぎの田をわけさる流まいたを海むさひあて

一 守てま二物を二かきて友へ海り一 流すは條

一 かん^音ふ二好をゆか

一 かん^音ふ二好をゆか

一 竹をさしむるに竹をさしむるに竹をさしむるに竹をさしむるに

一 竹をさしむるに竹をさしむるに竹をさしむるに竹をさしむるに

一 竹をさしむるに竹をさしむるに竹をさしむるに竹をさしむるに

才十一

雲雀採支新時同前鶴採二斤羽懸ト云支竹ヲ不刻ニテ右左ヲ削テ
窮テ互達ニ採也數七ツ成リ竹ノ上ニ如帯下之長可ニ取計ニ可信
雲雀ハ一採カス百之一等ノ數ニ百之鶴ニ多ク限支竹ハ大和竹ニ七五ニナリ

一 鶴採 事行をさしむるに竹をさしむるに竹をさしむるに

一 竹をさしむるに竹をさしむるに竹をさしむるに竹をさしむるに

一 竹をさしむるに竹をさしむるに竹をさしむるに竹をさしむるに

字は肉を以てをばははる千又なるれよの餘を
字せし末を切りて字ははるを一口にみろく本
口大の口より一口に切りてははるを
を以て字せし末を切りて字ははるを
ははるを以て字せし末を切りて字ははるを
ははるを以て字せし末を切りて字ははるを

は切り

一 務拂は行ははるを以て字せし末を切りて字ははるを

竹の目とくまをくしりて下へ枝とくまをくしりて
ぬれ居

一 晒拵より弱子田分を七月に比せし能くするは竹に
をまきとて拵れ拵おと拵りしは拵の如き二のをを
れぬよりけりたをまき又青の如く時と晒り
まにハ拵れ拵おとまきとて晒りとすまされはの事
のみまきも可用

卷十二

一 爲るに於ては餘はくを以て一二年と爲るは確七階
ハカクけるまじし竹の根を以て根を以て年々小切す
及一 間あらず。中々一丁加らず。根はまじし。カク
るも。又伯山を以て。物敷と爲す。て。まじし。毎
年。には。一二年。其。年。と。爲。て。持。た。せ。
一 爲るに於ては。數。年。と。爲。り。あ。ら。ず。カ。ケ。ハ。ま。じ。し。ハ。め。り。

とくくを雄と法かつけこひちうひか切けれは
四根八回名

一 新形と産敷かつけて毎まじまはめをさへん

うけ産と終子懸るや

才十三

一 産の尻名

産 多物 鳴尻

鳴物 大産 小産

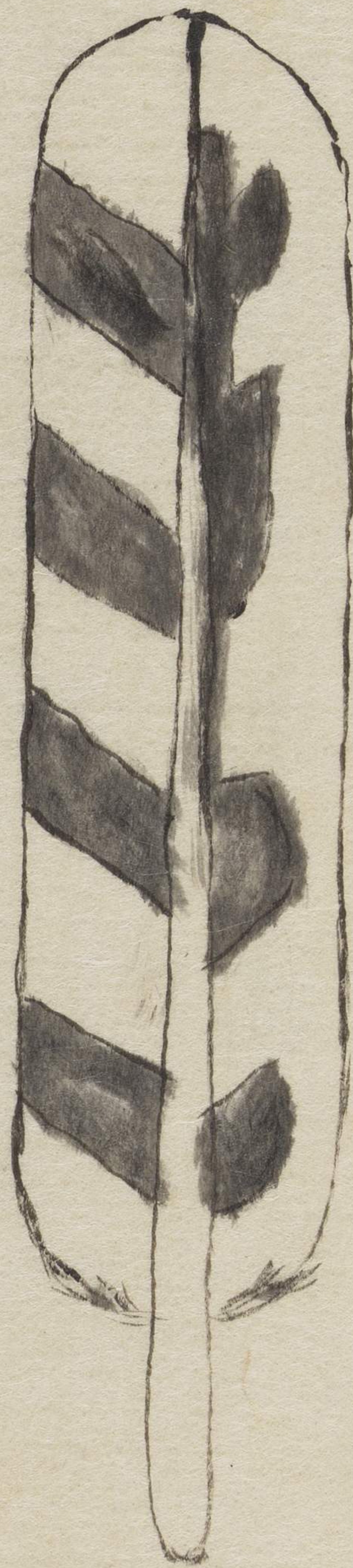
一 十三尾のくまを

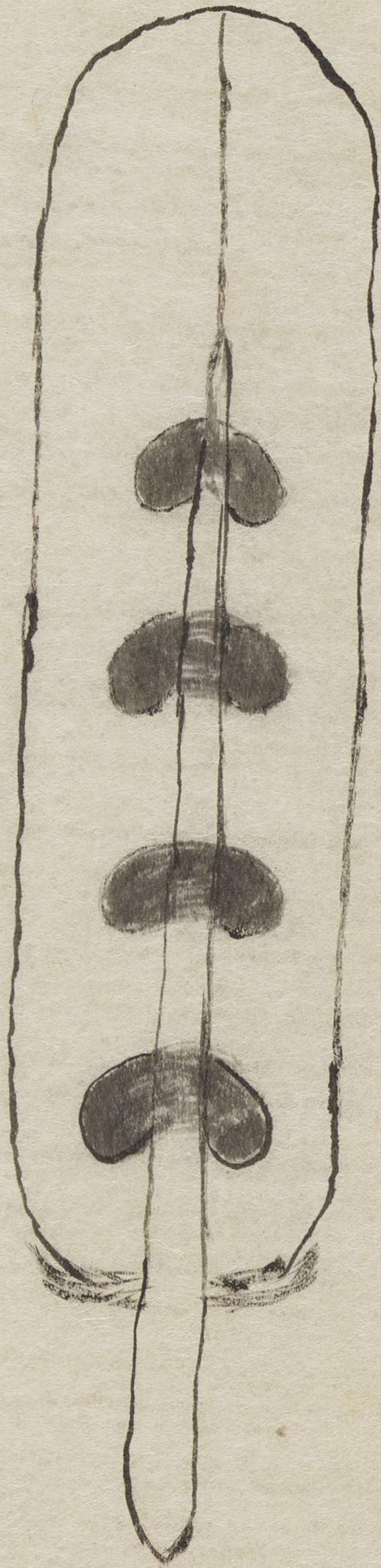
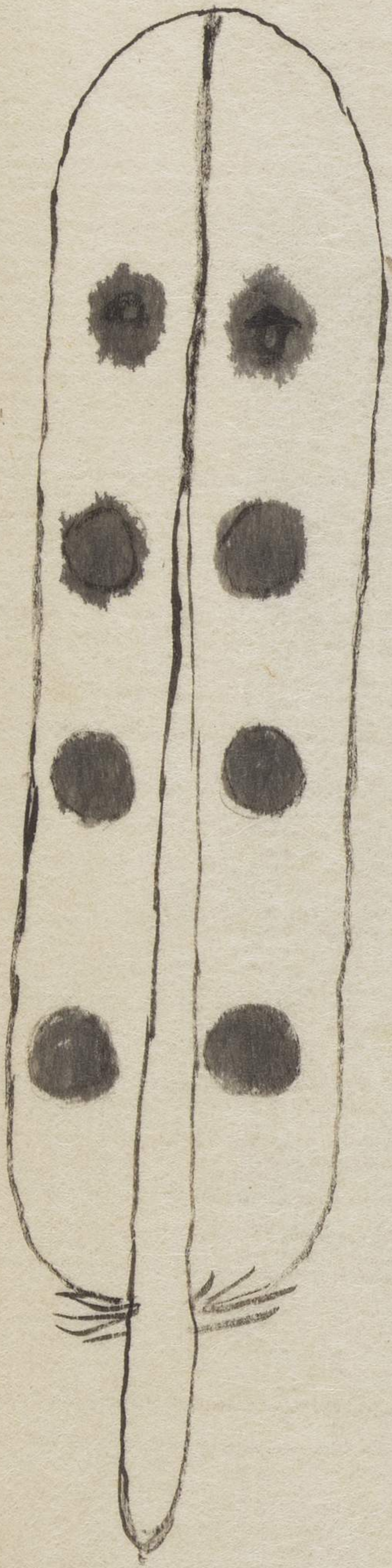
一 十四尾のくまを

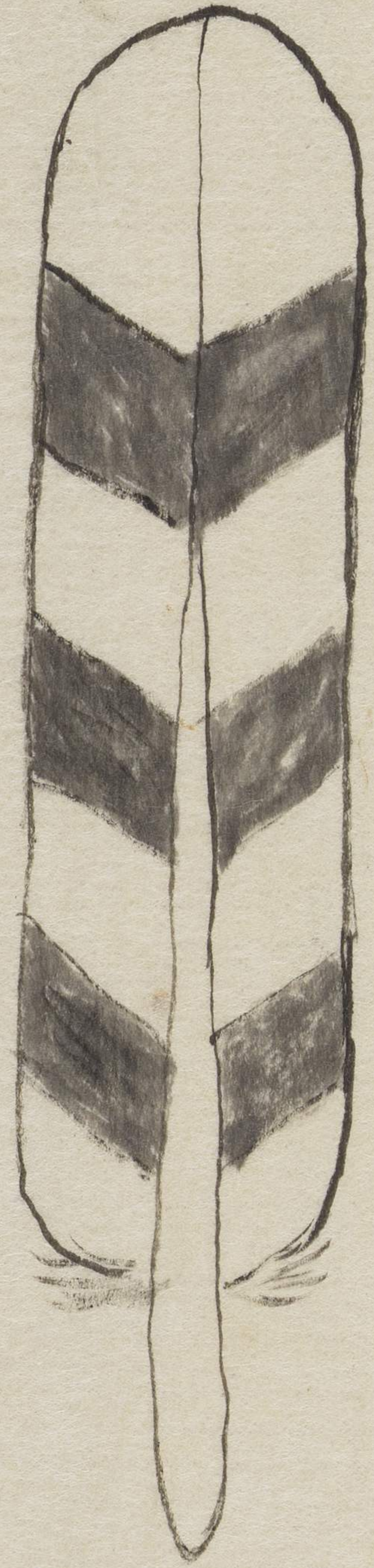


十三尾と云

十四尾と云







才十也

- 一 唐の羽の文を帯よると上は七羽と云ふは羽衣を指す
- 一 白鼻塞とは鼻母うゝ鼻毛を云ふ乱鼻とは鼻毛の乱る

一 へりかんとはまひりきりきりかんとは眼の下は色さぬ

色さぬの毛詰具と云はぬ毛を結毛と云はぬ羽うら

は上の色と云はぬ体陰は色とはは物の色や

一 ふみりかせぬ中人は色といはぬ髪ははは色と云さしりりと

は毛乱糸といはぬ物と云はぬ葉は色とはは内股の色や

縮取といはぬのものもは色と云はぬをさしりりとは眼の

うら毛と云はぬをさしりりと

経席上人所本ノ毛ヲ云

一 母衣は毛とはぬぬははと日事うしぬれをうの金
れ羽こもとをたとまらる

一 頂上とハ次のたてこを原ををなとまら

一 びやうさばを風とと一挽色用たてし垣からま

一 かき月めをに公とまらうち流あ急をみ

一 とりかこちりまをさうまことまら

一 何さうとは指はみろくもとをなとまら

本会

一 くのくとい指のうへをいさる

一 きたうれをいさるのえいさといはる色といはるはむむ
と色といはるはむむ尾をいさる

一 松尔は色をいさるのえいさといはるはむむ尾をいさる
はむむ尾をいさる

一 鶴は松尔の時こころをいさるはむむ尾をいさる
と色といはるはむむ尾をいさる

一 一むむ尾をいさるはむむ尾をいさる

一 長先をきくく日やせ七時の月二の形を云

一 好く色は猫の色や

朱子

一 寝る時見と云は朝白靴のト云は時分

と居たのト云は寝るの目とみおあるは

白黒眼ぶらむ一方は一方は

あは日好く云は云は云は

一 身を母胎前におお敷く事一 あらざるを忘るるな
のくも前後のちにおくは心わゆる一
一 及びくともいはたし方におあひあひすは
前後におおる時をうへをきく一 あらむ
しをとおとむは後身れ下色しつてはあむ
くもくも世角れ上の色をきつてやるのなるぬ
復は力にけり色をたてぬ

一 書を調へ 諸法却と云ふは 又調ふと云ふは 書を
よく物をとこふの上めてハ能くして ありし
何れ^とハ 神よのて 遊^とて 遊^とちし かけを
さるをハ 神よのて 卷二と云ふ 神よのて
て おのて 諸法却と云ふ 諸法却と云ふ
を 神よのて 諸法却と云ふ 諸法却と云ふ
へて 卷二と云ふ 諸法却と云ふ 諸法却と云ふ

二解を以て細きをまきくへはかゝりてせしめられぬと
るを以てはは夜なと何れやと云へりてまきくは

第十卷

一 色相を以て色を以てしては色を以てせぬ事云ひ日
を以てしては色を以てしては色を以てせぬ事云ひ日
を以てしては色を以てしては色を以てせぬ事云ひ日

一 色相の相離念及く世解ハ聲はまきくは

一 急やうふらと危れぬのへ今まゆおや

一 小窓のれひきさうあのかみせは危の内股の根をとらる

一 小窓のれち態のとりひひらちのQまねとちとるをく

一 色ひとまおたうのるや

一 明れらむのるや

一 菱みさらきを執はト世角の根たのる方句

二 斗ト世角れ福存のたしや

三 斗 時節のうさたのさ

四 斗 ねうのうさたのさや

五 斗 也とのたのさや

六 斗 内とれたのさや

七 斗 万の根や分よるをうさ

一 兔のうせは尾の尾をさるるをとりもるるをうせのうせをいふ
まうてゆてふりまへ

一 とうとうひは尾にうさうさうをとりもるるをうせのうせをいふ
てゆてまうてとせとをさるるのうせ

カサセ

一 船の焼半はるる一はみろつらおまをるる一上守下守

や好しもある上のこのははろつらよめとりあつらと回
半 西胸二本 西天二本 頸骨一本 胴骨十本 串一本 横様二指
以上五本也

一 鬼の焼串ハ二母十二也 母一をを上守下守上焼
はをとうる也

一 夜を挽るを二母十二也 母一をを上守下守上焼
焼けるは是れよく一て三也

一 鷄羽ト云ハ水より一に 追居一上守相成タカクたるは云々

一 舟を挽るも二母十二也 按れりとも年よりともをとぬりた
るは是れよ
舟を挽るは其のよきを招くは云々

一 力挽るとハ有る也
按れり又其のよきを招くは云々

一 高石殿下へ向て北右側。為控上云左へ下へ向て北
一 架玉と稱と云は架玉より。高石といふこと。天助を
左側。為控上云

一 沖持神宮格殿上。格殿上云八年の如く。即ちあること云

一 安月凡物と云と云は。本安月と云く。安月云

一 安月凡物を云と云は。色を云。即ち色を云

一 安月凡物を云と云は。色を云。即ち色を云

一 安月凡物を云と云は。色を云。即ち色を云

一 安月凡物を云と云は。色を云。即ち色を云

一 安月凡物を云と云は。色を云。即ち色を云

一 流多れせよけりてあま外とてしむせむとてせむとてり

一 此^{カニ}よりしむせむとてり
新^{カニ}被^{カニ}とハ衣露^{カニ}多^{カニ}く下^{カニ}しむせむとてり

一 新^{カニ}被^{カニ}とハ衣露^{カニ}多^{カニ}く下^{カニ}しむせむとてり
一 新^{カニ}被^{カニ}とハ衣露^{カニ}多^{カニ}く下^{カニ}しむせむとてり

一 流多れせよけりてあま外とてしむせむとてり

一 此^{カニ}よりしむせむとてり
新^{カニ}被^{カニ}とハ衣露^{カニ}多^{カニ}く下^{カニ}しむせむとてり

一 流多れせよけりてあま外とてしむせむとてり
一 此^{カニ}よりしむせむとてり

一 流多れせよけりてあま外とてしむせむとてり
一 此^{カニ}よりしむせむとてり

一 らんういんさるさなはかしよりを時を記すなり

一 尊れうらるといふはまはれり也 秋を能得と句也

一 夜を白くたるとも 撫せねん云
一 小なるの山より峰より上るラカウメカニテ上ルト云なり
一 前よりをいふとぬきさるは是をいふなり

く撫と云なり

一 多の持て 嶺へ上ルハカウメカニ持白と上ルト云なり

一 後よりと云なり 福や母と云なり

一 言多しハ新のち又取るとハ新のり

一 小根れ 統と云なり 又ハ子の統大云

御覽

一 お急ぐらむいふはるる神くまの御座はるる御座

一指さぬまのいさめさちいふはるる又さぬまの御座

とまき—とまき

一 ちるぬあといいさるるおはるる御座

一 ちるぬあといいさるるおはるる御座

此時ハいふた

一 小倉の地味と云ふはぬう——を教をたかくしと云ふ

一 さひの宿と云ふはぬう——たうと云ふ

一 志を好むと云ふはぬう——使たうと云ふ

一 志を好むと云ふはぬう——志を好むと云ふ

一 志を好むと云ふはぬう——志を好むと云ふ

一 志を好むと云ふはぬう——志を好むと云ふ

一 志を好むと云ふはぬう——志を好むと云ふ

生事を教へば色相を心へんるに當りては
一

一 色相を心へんるに當りては

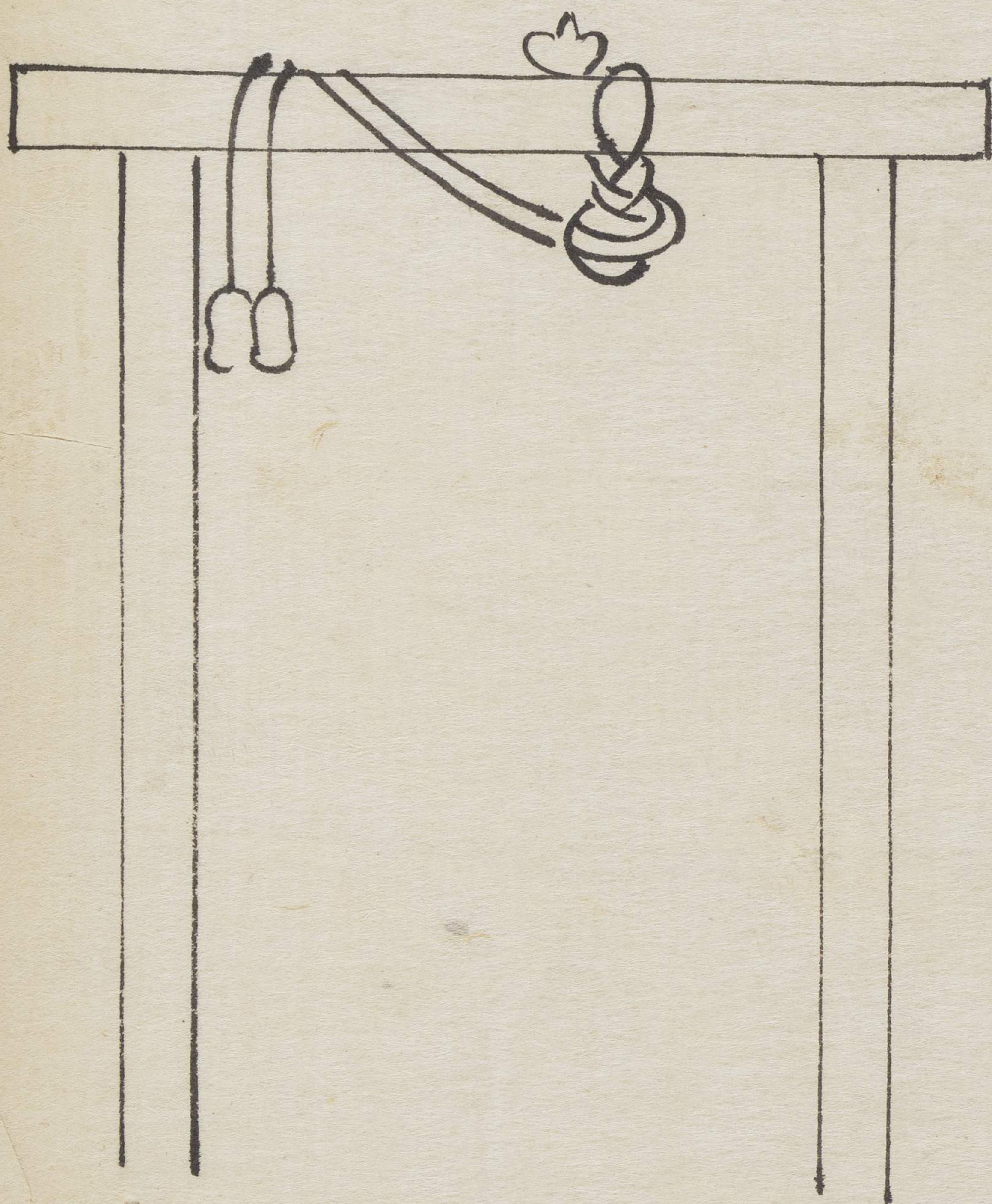
一 色相を心へんるに當りては

一 色相を心へんるに當りては

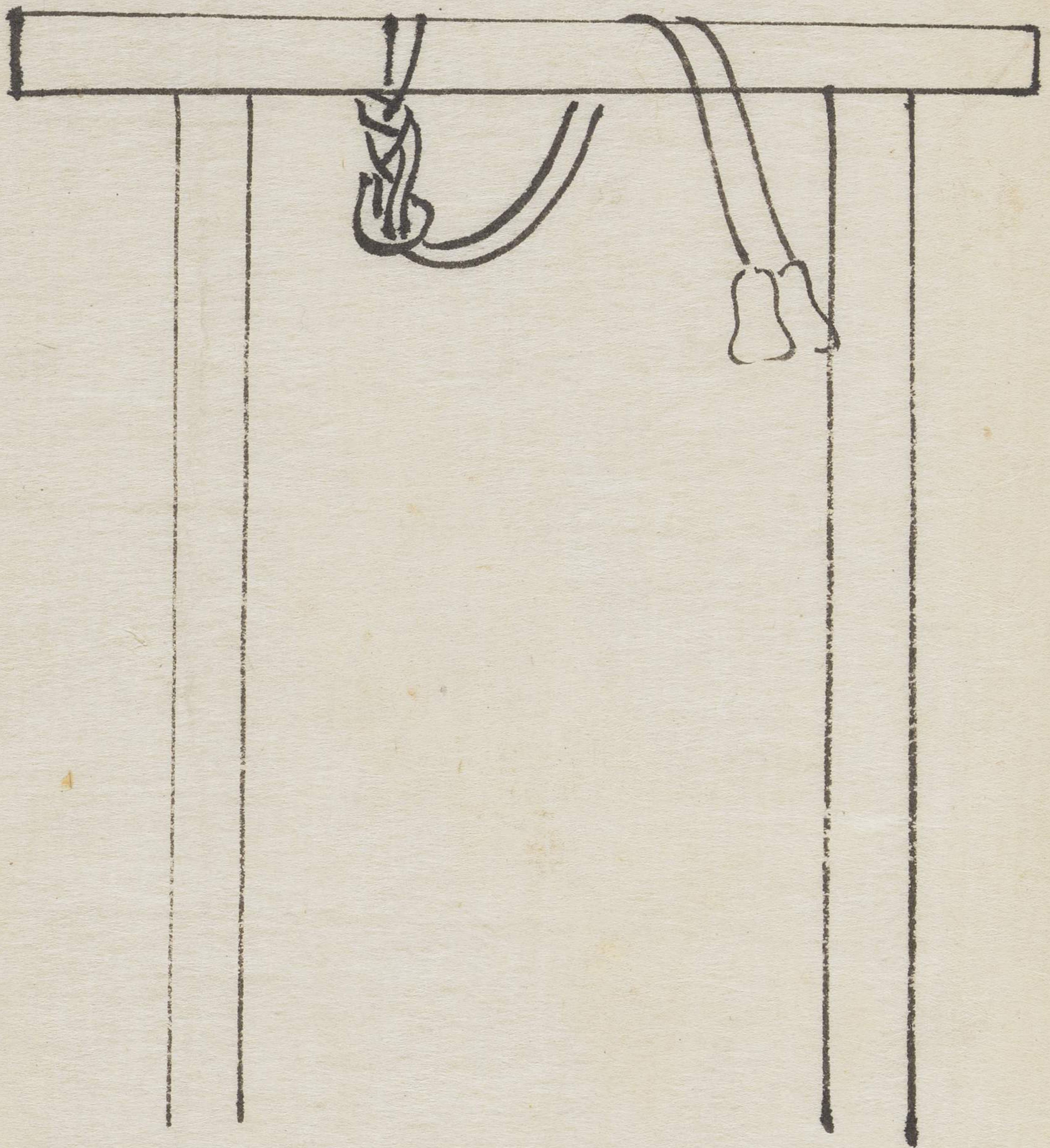
一 色相を心へんるに當りては

一 色相を心へんるに當りては

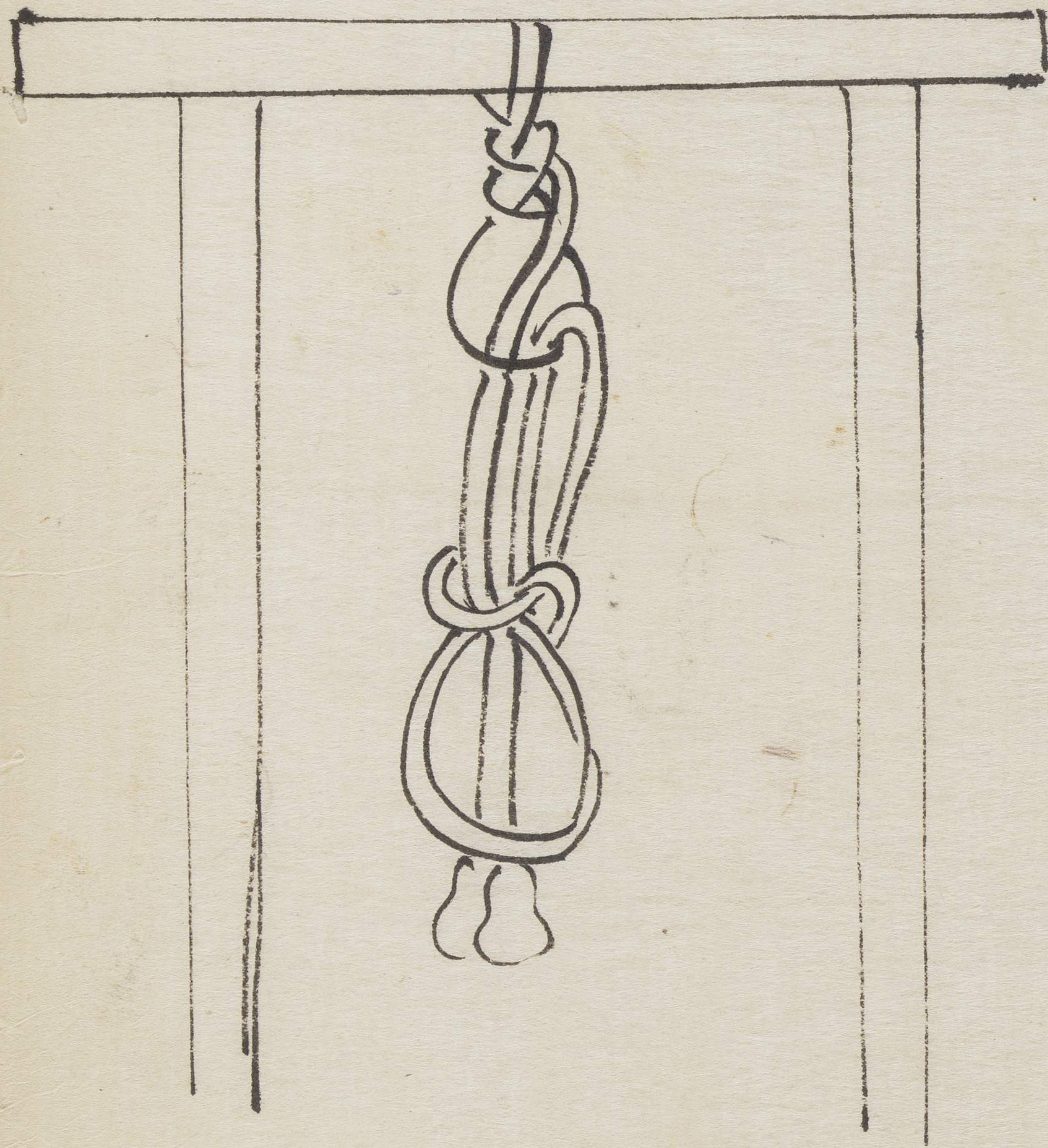
負鷹為セツサリ
白丁左へ架木懸ル
中ヲ取ル



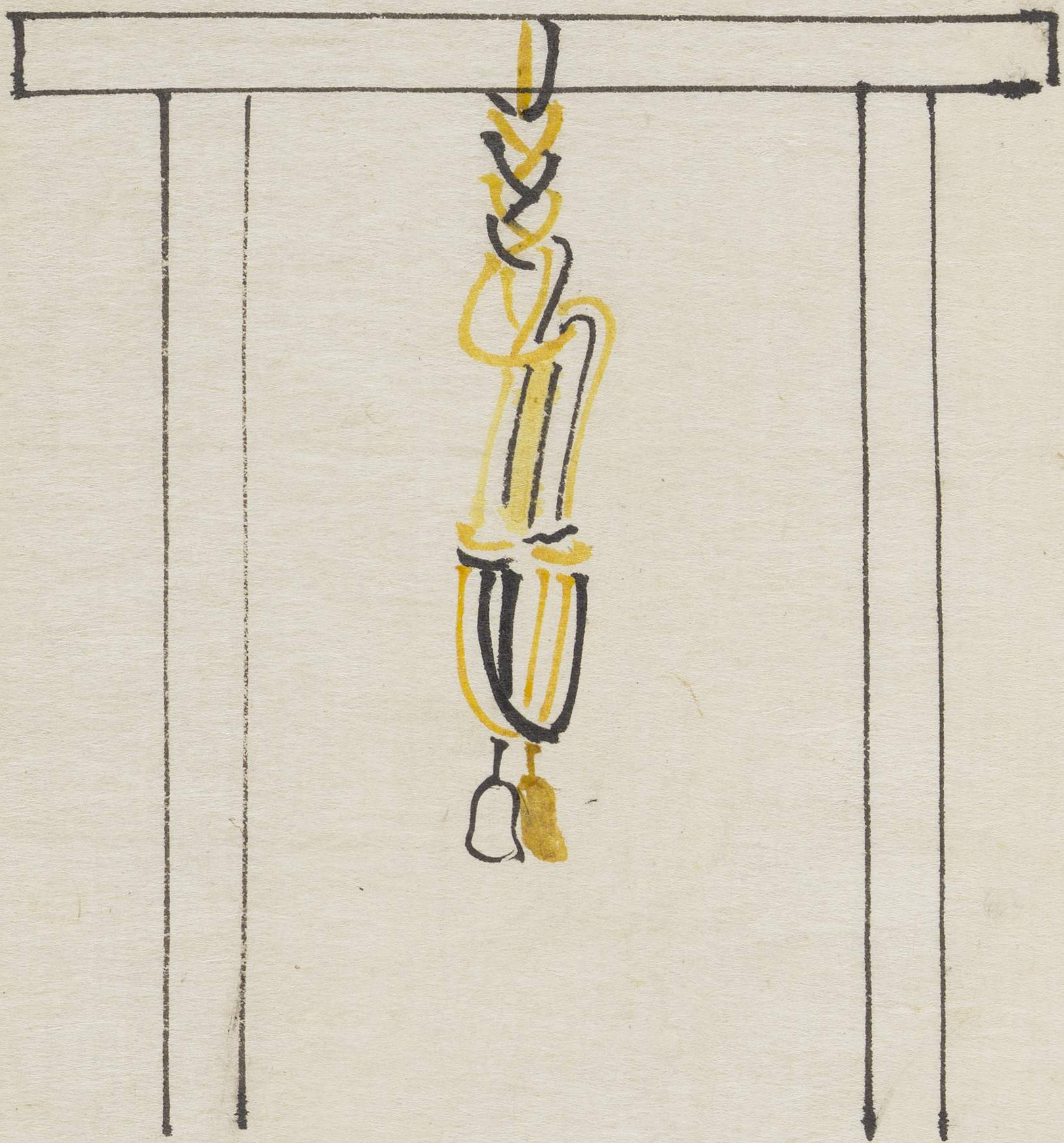
兄鷹五ノナリ
向ノ右ノカケル

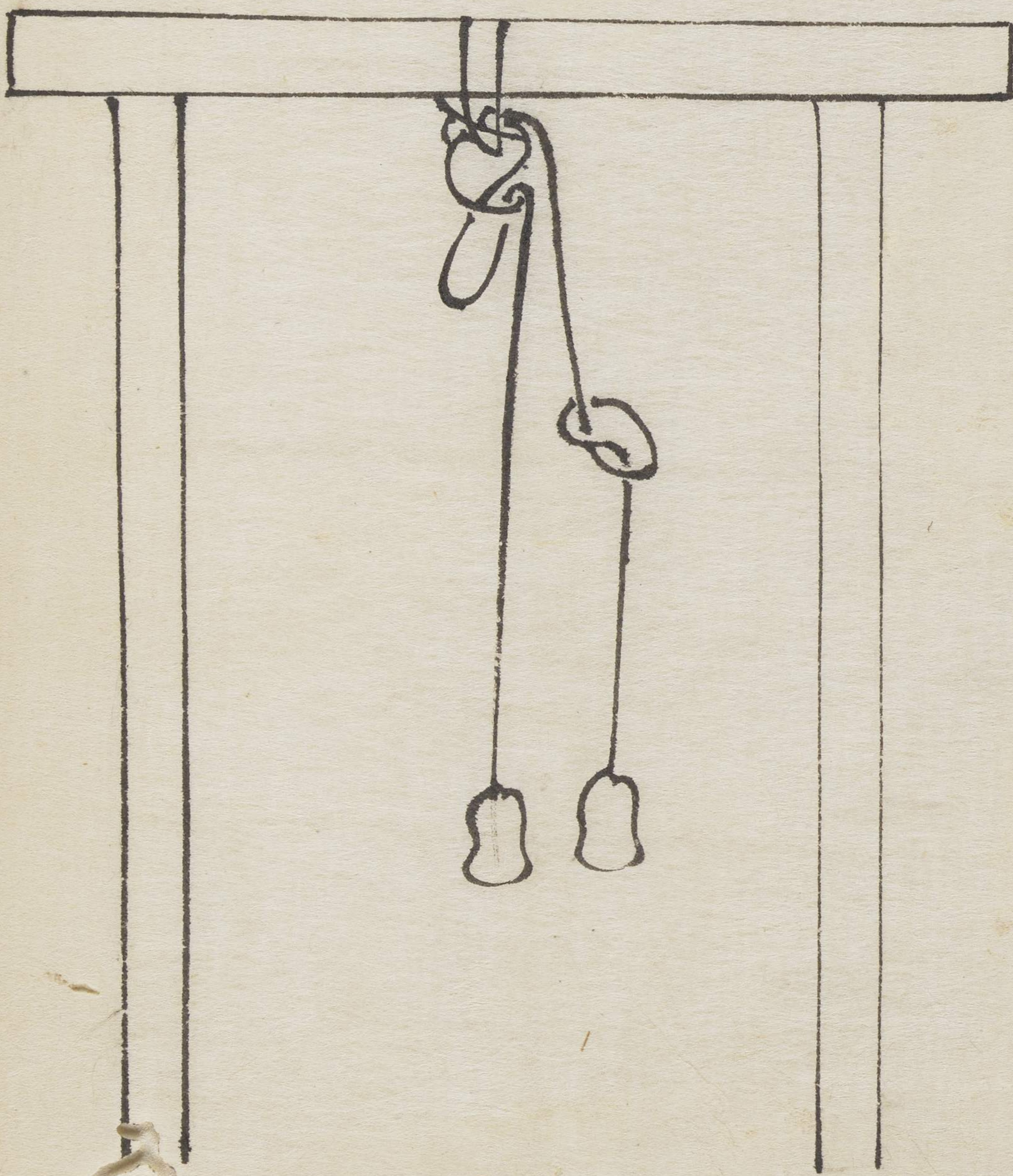


山道五ノサリ

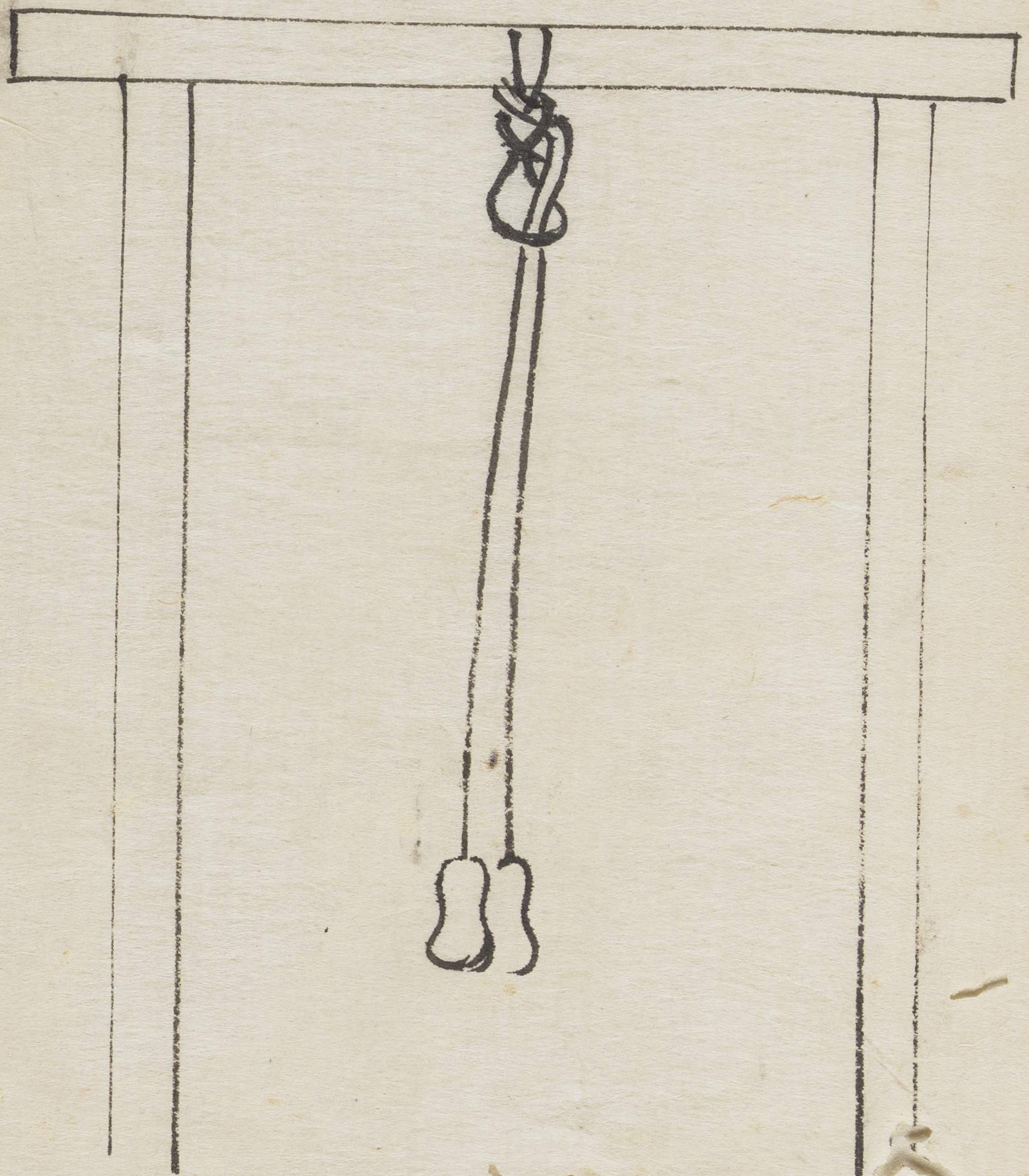


鳥屋五ノナリ





日通三ツサリ
休

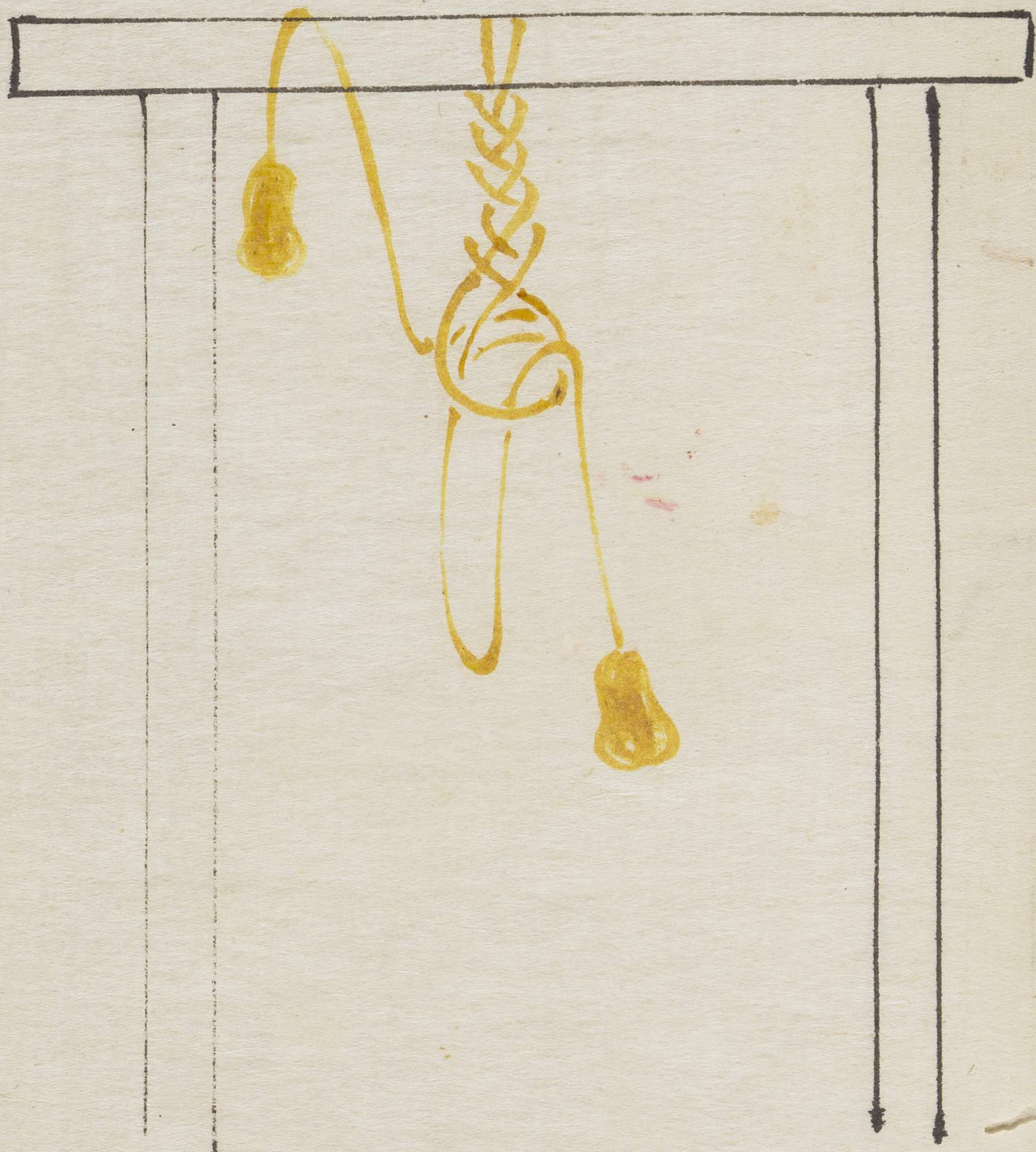


大草小鷲

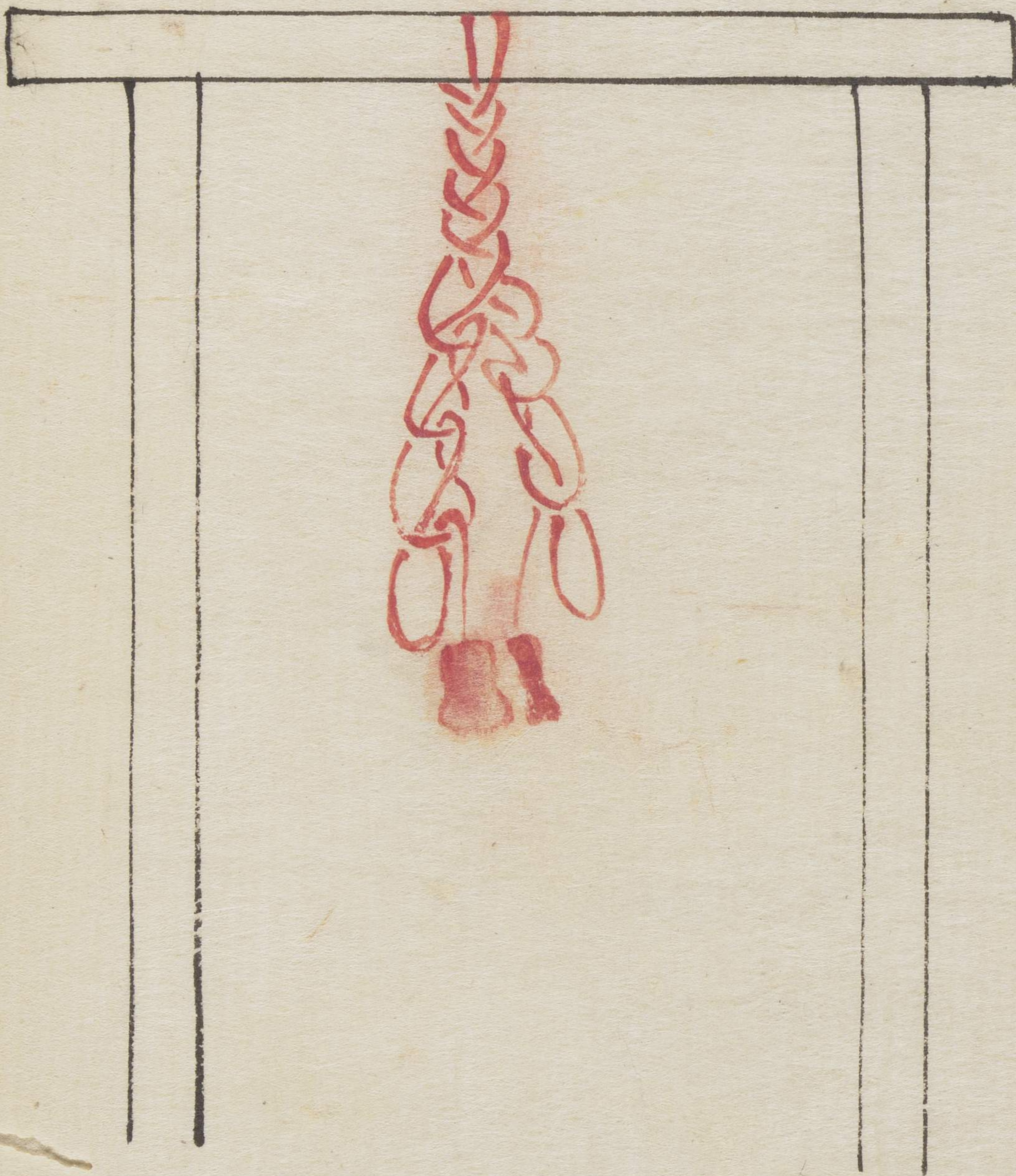
三ツサリ

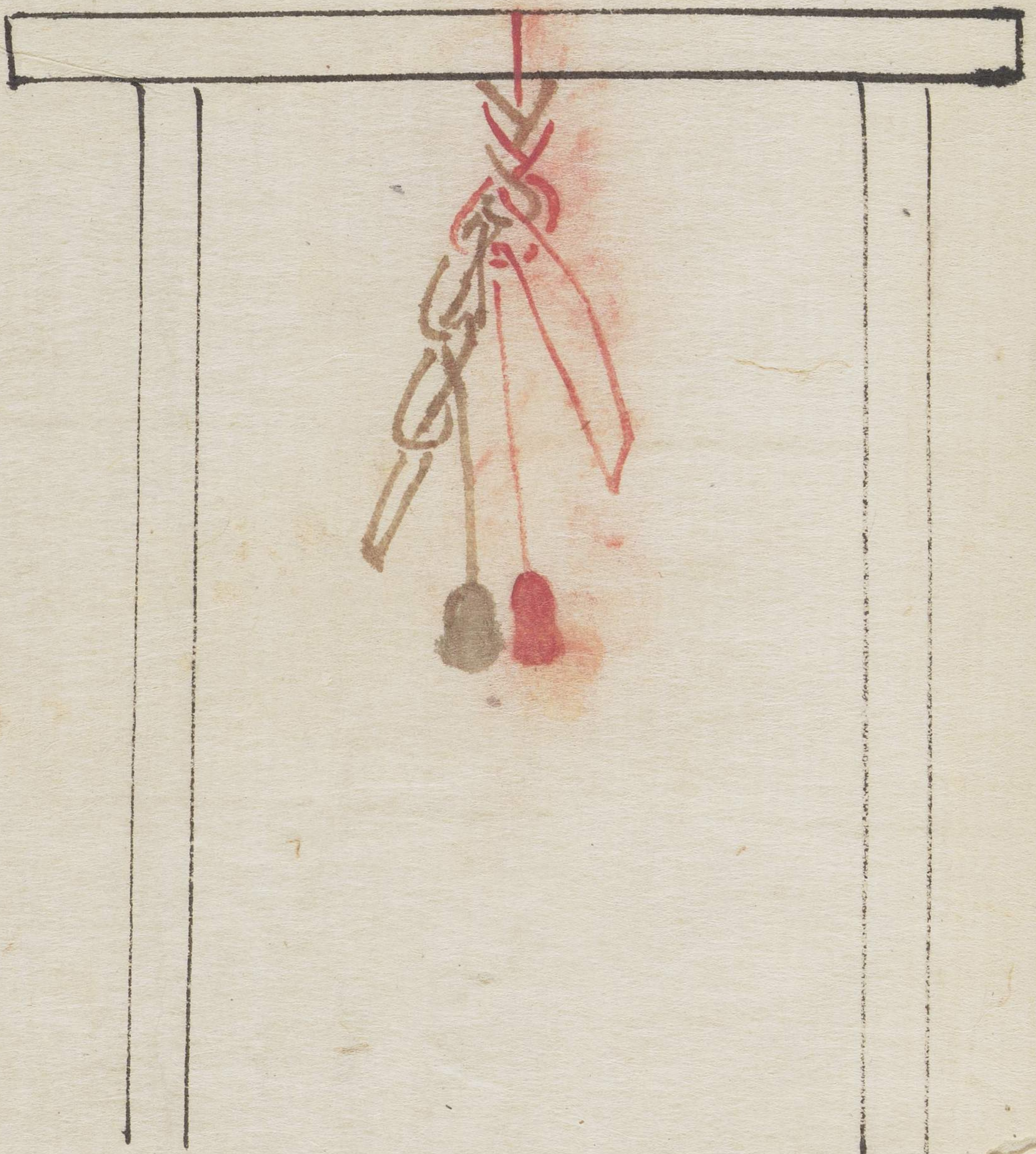


六
十
年

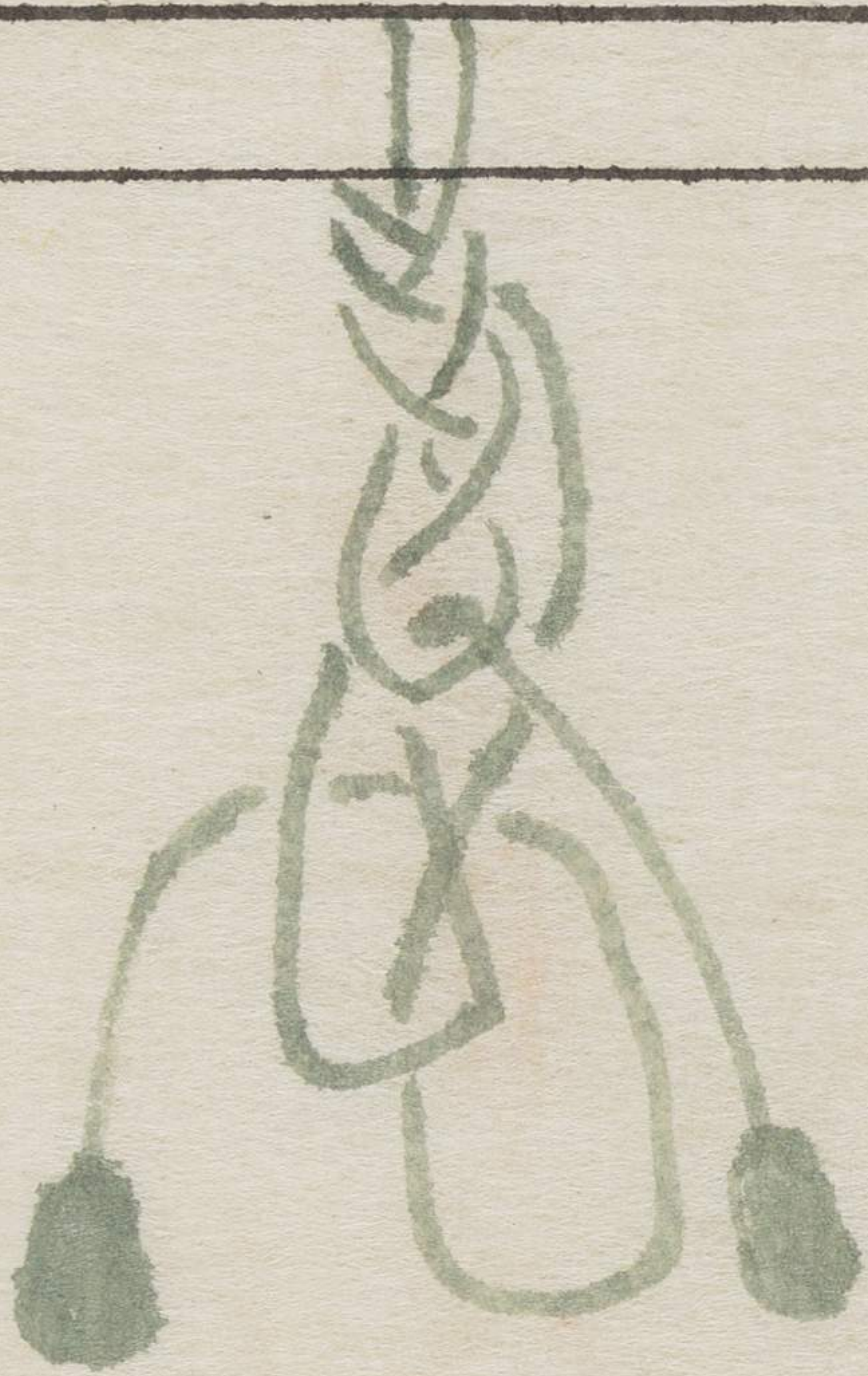
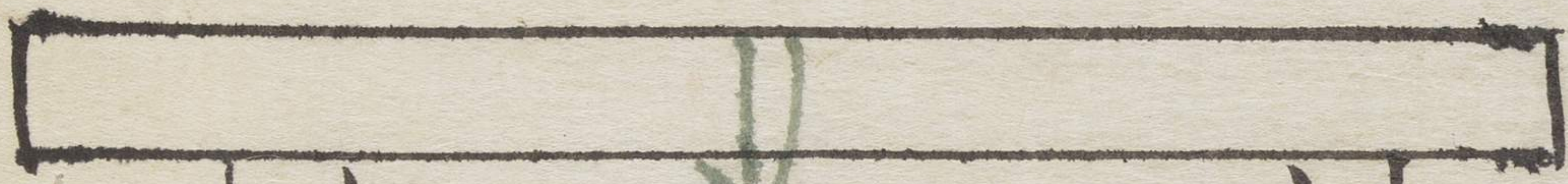


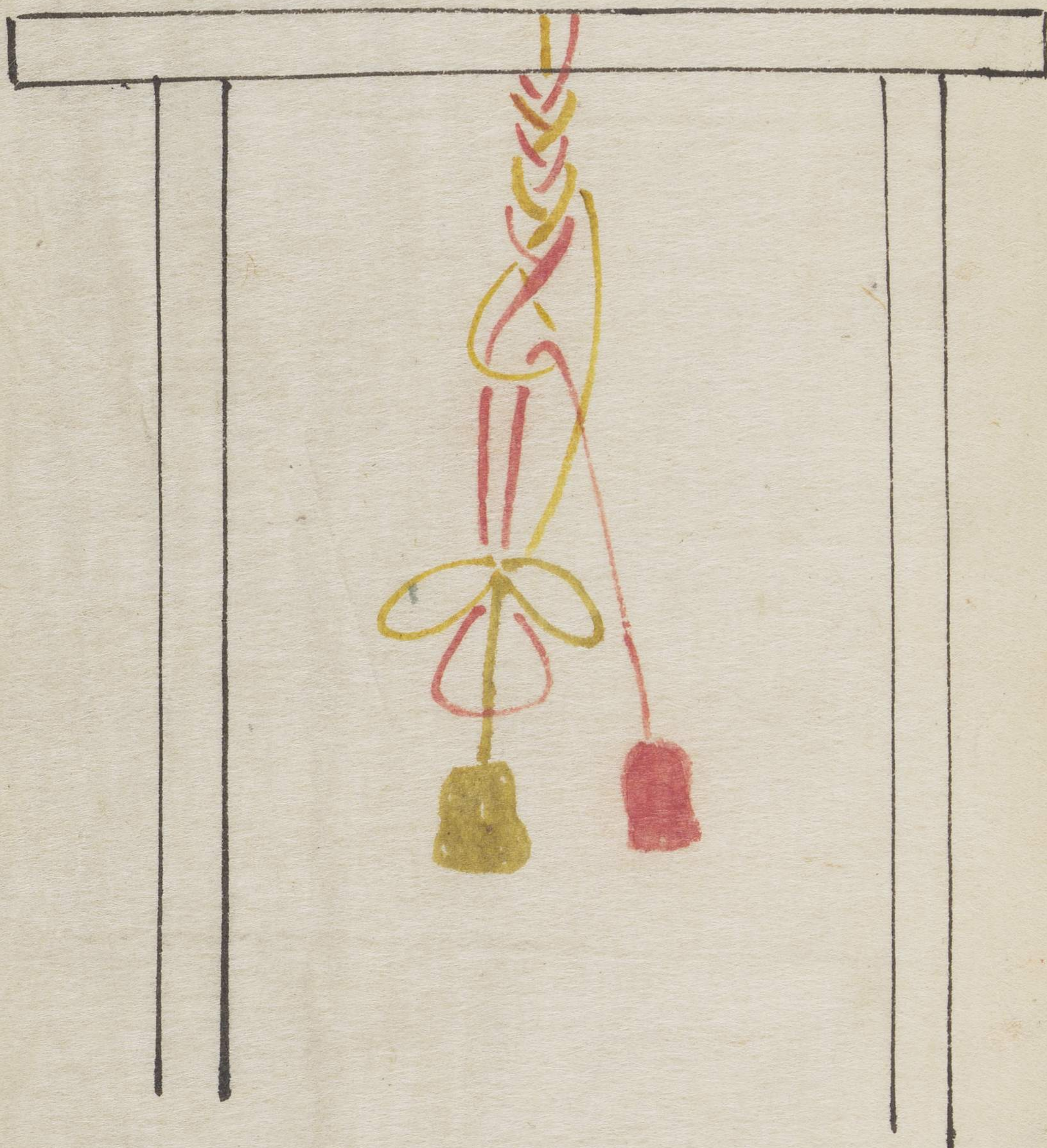
宗子千





12





久留米市
白吉町
平野西郎